

あなたに

出逢えて：

— 第二十五号 —

* * * *

— 今日 は 福 の 神 さ ま に

来 て い た だ い た よ う な . . .

—

七 月 の 春 美 会 を 始 め さ せ て 頂 き た い と 思 い ま す 。

今 日 は 、 菅 原 先 生 の 親 友 で い ら っ し ゃ い ま す 、

北 奥 先 生 に 来 て い た だ い て ま す 。

ご 紹 介 の ほ う は 後 ほ ど 菅 原 先 生 の 方 か ら お 願 い い た し ま す 。

北 奥 先 生 の お 話 を お 聞 き す る の を 本 当 に 楽 し み に し て い ま す 。
ど う ぞ よ ろ し く お 願 い 致 し ま す 。



* * * *

先生

今日はどうも有難うございます。

紫苑さんと一緒に、北奥先生がお見えになるということで、空港までお迎えに行かせて頂きました。

お名前を伺って、偉大な先生がいらっしゃるのもうドキドキして・・・本当に驚かせていただいたのは、お二人の会話がとても少年のように清々しく森の中の湖にいるような感覚になって、あまりにお二人の心が純粹で、凄いなと、色んなものをかなぐり捨てると、こうなっちゃうのかなという感じで聞かせていただきました。

全て、人間の道から、そして色んなこと事も学んでいらっしゃるそんな先生をお迎えてできる事がこの上ない喜びに感じさせて頂きます。

そして、私みたいな者に皆さん集まってくださって本当有難うございます。

春美会という会があつたからこそ私は自分の芽をそのまま伸ばさせていたのだような気がします、そのままだったらきつとつぶされて死んでいたかもしれないし・・・

でも、息もできてここまでちゃんと来られたのは、御一人御一人の愛情が有つ

たからかなと思っております。私自身、自分の務めはここで止めるのはもったいないので、おあげしたいというのがいつもあります。それには日々の努力も必要です、

私も頑張りますのでどうぞ皆さんも頑張ってください。

紫苑さん

それでは、菅原先生より北奥先生のご紹介をお願いいたします。

菅原先生

こんばんは、五月にお邪魔致しましてまたお目にかかれて光栄でございます。さて、今日私の兄弟弟子であるところの、北奥先生をお迎えする事が出来ました。

北奥先生からかかってきた電話の声を聞きますとあの青春時代がすぐ思い浮かべる事ができます。まれに見る、この世でなかなか会うことの出来ない偉大なる師匠の下で青春時代を北奥三郎先生と私どもは過ごしたわけです。

この北奥先生の声を聞く、深い縁が皆さんに有ったんだと思います、これから北奥先生心行くまでお話を聞かせて頂きます、どうぞよろしくお聞きください。

北奥先生

皆さん今晚は、北奥三郎と申します。

北奥三郎ではございません、一字違いで大分ちがいますね。

今日は、『愛と死を見つめて』という、本が出版されたり、映画になつたり、ドラマになつたりしておりますが、それにまつわるお話をさせていただきたいと思つてまいりました。

私は十七、八の頃から短歌をやっております、和歌ですね。

私、現在八十歳です。年齢は考えた事ないけどそうなっちゃつてゐるんですよ。

短歌をずっとやってきまして短歌の真髓とは何だと、これは人生の真髓とも言つてよろしいと思ひますが、私は相聞（そうもん）と挽歌だと思ふんですよ。

相聞とは、これは恋の歌ですね。

人を好きになるそういう短歌が万葉時代から伝統的に伝わっております。これは男性と女性の間柄といつてもよろしいかと思ひますが。

これが、なんと言つても短歌の真髓ですね。

私の家内は六年前に亡くなつて、ちやうど七回忌を迎えようとしています。

縁が有つて結ばれた訳でありますけれども、この相聞ということが人間の全世界何処へ行つても同じだと思ひますね。

やっぱり人という字は一つじゃなんですね二つが重なって人という字になるんでですね。これは人間でも同じだと思います、特に男性と女性の間柄というのは本当に大事なもので、そこから色んなものが生まれていくんですね。

だから、相聞というのは短歌の真髓であり人間生活の一番根本になるんじゃないかと思います。

それから、もう一つの挽歌、この挽歌というのは車をひいて歌ったってことなんです、何の車をひいたかというのと亡くなった人を乗せて引つ張った、お弔いの歌、それが挽歌って言うんです。つまり人の死ですね、要するに出会いと別れということなんです。

人間が出逢うという事と、それから死によってその人と永遠に別れるということ、こういう出会いと別れ、これが短歌の極地であり人生の極まったところじゃないかと思うんです。

それで、挽歌の歌を探していたところ、『愛と死を見つめて』に行き着いたんですね。若い人の愛情とね別れを扱ったいわゆる挽歌じゃないかと思っています。『愛と死を見つめて』の本がここのところ復刊といえますか、単行本で出ているんですよ。

往復書簡（文通）、三年の間に四百通の往復書簡があるんですよ、凄いいね！

そんな人見た事ないですよ、いかにその二人のやり取りが心を許し合い、また心から相手を慕っていたかという事を表しているんですよ。

私、色々書かれている物を見て感銘を受けたわけですね、それで皆さんにもお話ししたいなと思ったんです。

本は往復書簡が中心で、その中にミコさんの日記が出ております、この日記が非常にご本人の気持ちをよく表しているんですよ。

マコさんですか、その人は四十年たった今でもまだ初恋のミコさんの事が心の中にずっと灯っているそうですね。

ミコさんは

『あなた私の命まで生きてちょうだい』

と、いつているんですよ。

こういう気持ちを私は聞いて四十年前かもしれないけれども現実の目の前で起きているような問題に私思えてきたんです。

少女と青年の純粋な手紙の交換、また日記とかを見てね素晴らしいなと思いました。



こういうふうに純粹に相手を思つて・・・。

だから、四十年たつても鮮烈な印象を皆に残しているんですね。

彼女の病氣が三年後に再發した時、彼に言わないんですね、なぜかというところ・・・。それなのに右顔面にも癌の症状があらわれてきた、本当は会いたいのにもミコはマコを呼ばなかった、静かに死の覺悟をしたのである――

何も言わないミコにマコは怒るんですね、マコが歸つた後ミコはこういう文を書いているんです。

『嘘の嫌いなあなたは、私が嘘をつくといつて怒つた、ただごめんなさいと言うのに何のこだわりもないけれど、あなたに教えてあげたい、人には時には悲しい嘘を付かなければならない事を』

人間が病氣になるということがどういふことか、若い人が不活の癌におかされて短い命と知つたときにね、意地悪してなんだかんだと言つて泣いた時にあなたが涙を拭いてくれた。

私はいつ死のうと思つていたのに、私は生きる力をあなたから得られた、そう告白するんですよ。

『生と死についてつくづく考えさせられた。』

死の宣告を受けたところで命の尊さを実感した。

健康な日を三日下さい。』

という、ミコの詩がありました。

『健康な日を三日下さい。

一日目。私は故郷に飛んで帰りましょう。そして、おじいちゃんの肩をたたいて、それから母と台所に立ちましょう。美味しいサラダを作って、父に熱燗を一本つけて、妹達と楽しい食卓を囲みましょう。

二日目。私は貴方（マコ）の所へ飛んで行きたい。貴方と遊びたいなんて言いません。お部屋を掃除してあげて、ワイシャツにアイロンをかけてあげて、美味しい料理を作ってあげたいの。そして帰りの時、優しいキスをしてね。

三日目。私は一人ぼっちで思い出と遊びます。そして静かに一日が過ぎたら、『三日目の健康をありがとう』と笑って永遠の眠りにつくでしょう。』

こういう詩を書いているんですね。

どうでしょうね。私達は三日間の命、そういう風に短い命と宣告された人の気持ちね。その様なこと思った事あるだろうか。そういう事にぶつかった事はあるだ

ろうかと、つくづく思いました。

そして、次のような手紙を書いているんですね。

『マコ、貴方は私の何なのでしょよう。

将来一緒に暮らす望みもこれっぽちも無いのに、世間の恋人たちの様に、一度だって腕を組んで歩く事も出来ないのに、おそらく生涯病院で過ごしてしまう私に、いつも温かく包んで下さる貴方。

そんな貴方を世間の人達と同じように、「恋人です。」と言って良いのでしょようか。

マコは私の神様かもしれませんね。

何人かの人達は信仰を勧めてくれます。でも私はマコだけを信じていれば十分のよな気がします。』

私はこれを読んでね、ミコという人はマコを絶対者として、信仰の対象にはつきり据えているんですね。

だからこういう風に、神を信じ、自分の恋人を本当に神として

「ありがたい」と、苦しい時も嬉しい時も、一緒に貴方が歩んでくれたから、私は手術もしました、侘びしい病院生活も楽しく、貴方の手紙が来るのではないか、



電話が来るんじゃないかと、そういう喜びの日々を送ったので、いつ死んでもいいです。と言うんだよね。

『私の生涯は幸せだった。嬉しかった。』
こう言いきっているんですよ。

信頼するという事が、愛するという事がいかに素晴らしいものかと、その人の生涯を左右してしまう。

短い命でも私は貴方に会って、貴方が私に色んな面で助けてくれたから、信仰が無くても貴方が要るから、私はここまで生きたし嬉しかった。

原点があるんですよ。

「愛と死を見つめて」の前に「命ある死に」という本が出ているんですね。
それをミコは「買ってきて頂戴」ってマコからプレゼントをうけて読むんですよ。

女子大生ですけどやっぱり覚悟して亡くなるんですよ。

私、読んだ本は何冊かありますけど、愛と死の関係の本の原点の本が、この田宮虎彦と千代の「愛のかたみに」である。

大島みち子・田宮千代・窪田藤野・・・
この人達一様に、幸福だった、満足だったと言っている。

窪田空穂の「亡妻の記」という本が最近出版されたんですよ。大正の初めごろ書かれた文章なんですけど、歌人としては有名な先生ですが、初めての奥さんが亡くなった時の事を書いた本なんですよ。

窪田空穂先生を非常に慕い想う女性がいる、空穂先生も自ら想うようになって、結婚をし、二人子供を産んで、後に病氣になって亡くなっていくんですね。その時にですね、ご両親や先生、子供さん二人に歌った詩が有るんです。

『私は、こうやって実のお父さんお母さん、そして私の大好きな空穂さん、そして子供二人、こういう人達に囲まれて、死ぬるっていうのは、こういう幸せなことではない。嬉しい。』

死ぬときに嬉しいって言えますか。
皆そうなんですよ。

愛と死の本を四、五冊よんだんですが、その人達の最後の姿は、私は幸せだった。

良かった。こんな幸福なことは無い。死んでも悔いは無い。

愛情の力はこういう所までその人を持っていけるのだな。

皆喜んで死んでいる姿がね、大したもんだなあど・・・。

最後にはね、自分の恋人を神として、貴方のような人が要るから私は幸福にこの世を去って行く事が出来る。私の分まで貴方生きて頂戴って・・・。

私の恩師が書かれた論文の中に夫婦体協というのがあるんですよ。

人は男性と女性と何故におうなっているのでしょうか。

これは人に限らず、影と日と、プラスとマイナスと、二通りの対立とその合一によって万象を生命を幸福を生み出すようになっていく。生み出すは相反する二つの力が溶け合って一つになった時に生まれる。

ほんと人間というのは、男性と女性でお互いに信頼しあい、そして『人を変えないで自分自身が変わる』事によって、男女というのは合一出来るのだと恩師は書いてあるんですよ。

素晴らしい本だと思います。

私紹介しましたのは実例ですよ。

ですから思うんですが、幸福だった満足だったってね、世間的には不幸ですよ。短命で亡くなるんだから、だけど歓喜のうちにね、自分の生涯に満足して生きるというのは、長い短いの話してはないでしょう。

『三日間健康な日を下さい。』とミコは言っていますね。

一日目はお父さんやお母さんや家族と、二日目は彼氏と・・・何でもありません。これに本物の幸せなのでしょう。

三日目は二十年くらいの短い人生だけれど、今までの事を思い出して、本当に心から思い出を楽しんで、そして永遠に静かに眠っていきましよう・・・。事実、痛みも何も無しに最後は「お母さん。」と呼んだらしいんだよ。最後は、両親とマコが送って行くんですよ。それで話しは終わっているんですよ。

『三日間の健康な日を下さい』

やっぱりそういう風に意味のある一日一日を過ごしたいものですね。以上でございます。

ありがとうございました。

*
*
*
*
*

*
*
*
*
*

〃
産んで

いただいた

あなたへ
〃

平成十八年六月六日

春美会の、先生の、本

そして、待ちに待ったホームページも同時に

皆様のもとへお届けする事が出来ました

深く感謝いたします



*
*
*
*
*

紫苑さん

六月に出来上がりしました本のご紹介をさせていただきたいと思っています。

長年温めてこられた思いをこれだけの中に精一杯詰め込んで頂いております。本の中には、本当に先生のやさしいお言葉のまま、お話をされたままのお言葉が入っております。私自身一回読んで、二回三回と読み直すごとに、

これは、私あのとときの気持ちとか、これはあの時感じなかったけど今度はこんな風に感じたとか、本当に不思議な本なんです。

本を読んで最初思ったよりも、二度三度と何回も読んで頂くとともに、深い先生の思いが伝わってくると思います。

先生の思いというのが小さな子供さんから、お母様に・・・子供さんを育てるために読んで頂きたい、という思いがあられます。後ろの方に

『お名前おみくじ』

という、お名前を書いて先生の方におだし頂く特別なページもあります、広く陽々

まで行き渡るように、先生のこの思いを御一人御一人が他の方々に伝えていっていただきたいと思います。

どうぞよろしくお願いいたします。

先生

この六月は一つの切っ掛けでホームページも出来上がりしましたし、本も出来ました。

本にならってホームページも岐阜の方で弥生さんに一生懸命していただいています。

それぞれ春美会のメンバー御一人御一人の方が私一人だけではなくて、それぞれ何かご意見があったら各自でメールなさって春美会のホームページとしてなお一層大きく・・・大きくするということは、物を増やすとか数を増やすのではなくて、中身を濃くしていきたいと思っております。

ここまで縁があった春美会でありますし、ここまでつながってきて、だんだん御一人御一人が努力なさって大きくなってきておりますので、これに準じて己の心に負けることなく頑張っていきたいと思えます。

今日はどう有難うございました。



菅原先生

皆さん方こんな立派な

『産んでいただいたあなたへ』

と、いう春美先生のこの御本が出来たということは、六十五億の人類一人一人にみんなお母さんがいるわけです。

お母さん無事に生まれた人は誰もいません、しかしそのお母さんの中で自分のお母さんほど尊いお母さんはいないわけですから、本当にこんな素晴らしい本ができた事をお祝い申し上げます。

どうか、春美先生を中心にこの会が大発展をなさるようにお祈り申し上げます。また、大発展するはずであります。

ホームページも出来上がった事ですから大発展すると思います。



*
*
*
*
*

*
*
*
*
*

〃 愛 〃

男と女

親と子

友達・・

— あとがき —

〃 愛おしい 〃 と思うその時

人は、なによりも幸せと感ずるのでしょう
北奥先生、ありがとうございました

第四十一回春美会

会場 魚一

日時 平成十八年七月十三日七時半より

— 司会・田尻 千明 —



はるみ会ホームページ <http://harumikai.net>

*
*
*
*
*